### **月曜日**

第1週目

日経平均株価はPER算出すれば「割安感」というように判断できる

現在、日経平均株価は「割安」であると判断する投資家が多いです。

基本的に、日経平均株価の目標PERは15％辺り。

現在、15％未満になります。

実は、日経平均株価の主軸銘柄においては好業績な企業が多いです。ただし、その他の銘柄が軟調に推移しているので、日経平均株価は安値圏になっているという事なのでしょう。

確かに、短期的な局面においては下落する場面が見られるでしょう。しかし、中期的な目線で捉えると、まだまだ上昇する期待値は高いのかも知れません。

もしも相場で迷った場合、数日単位の短い時間軸チャートで捉えようとせず、数週間～数か月程度の時間軸に切り替えて、じっくり相場を観測する事をお勧めします。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第2週目

今週はSQ（１１月）・最終算出日が控えています。

さて、相場を読もうと考えたときに、事前に1週間程度の指標や休場日などを確認します。そして、今週の金曜日はＳＱ（１１月）の算出日となります。

今回、ＭＳＱではないので、あまり気にする必要はありませんが、価格というのは理由もなく乱高下する可能性もあります。なので、事前に指標日など把握しておけば、新規建玉をホールドする時などの材料にもなります。

毎週、月曜日までに日本・米国の重要な指標とか休場日など。そして、全体的なチャートの値幅など把握しておくと、相場の先読みがしやすくなるのでまとめておくと良いでしょう。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第3週目

日本市場は中旬から下旬に向けた相場が始まります

さて、日本市場は中旬から下旬に向けた相場が始まります。早いもので、月相場は中旬を迎えます。そして、下旬に向けた相場観を組み立てなければなりません。

今後、日経平均株価の行方を想定した場合。

・当面30000円辺りまで上昇していくのか。

・当面28000円辺りまで下落していくのか。

2つの選択肢を考えて価格の方向性を絞り込めばよいでしょう。どちらの方向へ進むことが優位性なのか。現状、日本市場の主力銘柄は高値圏まで上昇しています。

そして、米国市場、為替ドル円など短期的に利益確定売りの場面で下落していますが、中期的には堅調に推移しています。そう考えると、買い絞って相場を観測したほうが、相場の見方としては楽であるという事なのでしょう。

もし、短期的な下落の局面が起こったら、素直に買いストップすればよいわけです。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第4週目

日経平均株価は月末に向けた相場観を想定しなければならない

さて、日経平均株価は月末に向けた相場観を想定しなければなりません。

早いもので、月相場は中盤折り返して終盤へ進んでいきます。ちなみに日経平均株価は、序盤から中盤にかけて30000円を達成できませんでした。ただし、主力銘柄においては高値圏で推移しています。

そして、全銘柄の評価になると軟調に推移しているという事なのでしょう。あとは、世界的なマーケットの短期的な下落の局面においても警戒しなければなりません。結局、米国市場が利益確定売りの場面に発展すると、日本市場のパワーだけで上昇する事は出来ないという事なのでしょう。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第5週目

日経平均株価は月末に向けた価格帯がどうなるのか気になる場面となる

さて、だいたい２５日辺りになると、改めて月末相場の行方を想定しながら戦略を組み立てます。基本的に、相場のパターンとして

・上昇トレンド　中期的に継続するパターン

・下落トレンド　短期的に起こりえるパターン

・持ち合いレンジ　何度も節目辺りで起こるパターン

現状の相場を考えると、○○○○のパターンでしょうか。※政治的・経済的な出来事や地政学的なリスクは除外して想定しています。もしも、突発的に何か起これば急騰or急落の相場に変化します。

その時は、戦略を変えて柔軟に対応しなければなりません。但し、今のところ相場が乱高下するような出来事は想定していません。まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

### **火曜日**

第1週目

日経平均株価は節目に当たるとだんだん相場が落ちついていく

日経平均株価は、活動的な場面のときは流動性が高いので動きやすくなります。

しかし、流動性が低いときは相場が落ちつくようになります。

だいたい、相場が落ち着く時期は、節目に当たる場面が多いわけです。

要するに、キリが良い価格帯27000円、28000円、29000円などの節目です。

この節目ラインに当たると、いったん価格が動かなくなり停滞する可能性が高いわけです。

ただし、ある程度の期間が過ぎれば動き出します。

今まで蓄積された圧力が、一気に放出されて動いていくという事です。

なので、価格が動かない時期は辛抱強く待って我慢することも大切なのでしょう。そして、価格が動き出したら、動き出した方向へ向かって順張りするということです。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第2週目

日経平均株価の主軸銘柄は堅調に推移しています

さて、日経平均株価の主軸銘柄においては堅調に推移しています。セクター別で、自動車、電機、商社関連のカテゴリーになります。このように、主軸銘柄が高値を更新しているのならば、日経平均株価は30000円を超えてもおかしくないレベルです。

さらに、米国市場と為替市場が堅調なので、日経平均株価は31000、32000、33000円など高値を更新してもおかしくないような相場となっております。では、なぜ日経平均株価は軟調に推移しているのでしょうか。

それは、日本市場における二極化問題が関係しているという事なのでしょう。つまり、日経平均株価の大型株においても極端に売られている銘柄もあるという事です。

ただし、いつか海外投資家によって日本市場は買われていきます。そのような条件が揃えば、日経平均株価はいづれ高値を更新していくという事なのでしょう。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第3週目

日経平均株価の5大商社の株価推移を調査する

さて、バークシャーハサウェイが興味を持っている日本の5大商社です。昨年、バフェット氏率いる投資会社が、日本の5大商社を購入したことで話題になりました。恐らく、日本市場の長期的なトレンドを考えているはずです。

あとは、好業績なので「配当利回り」なども考慮しているのでしょう。

その後、毎月１回程度の株価推移をチェックしています。

2020年の価格→現在の価格

・価格2726円→3376円　伊藤忠商事

・価格2562円→3440円　三菱商事

・価格1906円→2557円　三井物産

・価格1330円→1633円　住友商事

・価格654 円→1019円　丸紅

すべて、5大商社の株価は長期的なレベルで上昇しています。とにかく、日本市場の主力銘柄においては堅調に推移ししていることが理解できます。あとは、銀行、証券、不動産関連銘柄の上昇に期待したいところです。

例えば、不人気銘柄において「出遅れ感」として評価されれば、海外投資家は買い検討します。そうすれば、日経平均株価は30000円～31000円ゾーンに突入するという事なのでしょう。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第4週目

日経平均株価は平均１％～３％程度の値動きを想定しなけらばならない

さて、日経平均株価は平均１％～３％程度の値動きを想定しておかなければなりません。

まず、日経平均株価における変動幅１％＝約300円程度と算出します。

ザラ場において、安定した相場でも約250円～300円程度の変動幅が見られます。

そして、価格が乱高下すると約300円～600円程度の変動幅が見られます。

イレギュラー相場になれば約600円～900円以上の動きになる事だってあるわけです。

もしも、新規建玉をエントリーする時点で変動幅のことを想定しておかなければ、簡単にロスカットする場面に遭遇してしまいます。

そして、価格の値動きが活発になってきたら、新規建玉の枚数を減らしたり、ロスカット幅を広げたり、時間軸など工夫する必要があります。

とにかく、短期的な下落の局面に発展しているので、どこまで価格が下落するのか。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第5週目

日経平均株価は出来高ボリュームが少なくても動く時期がある

さて、日本市場の月末に向けた相場が気になります。基本的に、日経平均株価というのは大型２２５銘柄で構成されているので、あまり動かないというのが相場の定石になります。

ただし、政治的・経済的な内容が変われば、出来高ボリュームが少なくても動くという時期があるわけです。だから定期的なチャートの監視は必要になります。そして、動くときは一方向へ伸びていく特徴もあります。

なので、そういう時期は素直に動いた方向へ「順張り」するという意識が必要になります。そこで、逆らってしまうと海外投資家の動きに対して逆張りを仕掛けているようなものです。とにかく、上手に相場の波に乗ってトレード戦略を組み立てていくことが大切であるという事なのでしょう。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

### **水曜日**

第1週目

日本市場は新しい月相場が開始されます

早いもので月相場突入です。そろそろ、中期的な目線も視野に入れておかなければならないでしょう。要するに、ここから年末に向けて日本市場はどうなっていくのでしょうか。

基本的には、買い圧力や出来高ボリュームは増えて行くという事なのでしょう。

現状、日経平均株価は安値圏に位置しているので「割安感」として判断されています。ただし、海外投資家による買い圧力が見られないので、価格は軟調に推移しているという事なのでしょう。

まず優先的に売り圧力が先行されれば、価格は下落していきます。しかし、ある程度の場面で踏ん張ることが出来れば、今度は買い圧力に入れ替わっていきます。そこから、本格的に回復していくという事なのでしょう。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第2週目

明日、日経225mini先物の限月取引が入れ替わります

明日、日経225mini先物の限月取引が入れ替わります。基本的に、このような時期は海外投資家によるロールオーバーが行われます。もしくは、すでに終了しているのかも知れません。

とにかく、海外投資家たちがポジション調整をおこなうと価格は動き出します。特に理由もなく、急騰したり急落したりするのは、建玉の入れ替えが原因となる可能性も考えられます。

なので、個人投資家は新規建玉を入れるタイミングと時間軸の注意が必要となります。せっかく、絶妙なタイミングで建玉をホールドしたのにもかかわらず、短期的な値動きによってロスカットされたら意味がありません。

そこで、さらに損失を取り戻そうと考えると、余計に無駄打ちとなる可能性もあります。とにかく、損失になった場合、いったん冷静になるまで時間を空けることをお勧めします。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第3週目

日経平均株価はふたたび29000円を目標としています

さて、日経平均株価はふたたび29000円を目標としています。

現状、主力銘柄「機械、自動車、商社」などは堅調に推移しています。

しかし、主力でない銘柄「銀行、証券、不動産」などは軟調に推移しています。

本来なら、日経平均株価は30000円を超えてもおかしくないような相場でした。

一層のこと、米国市場のようにハイテク関連銘柄を採用すれば、

日経平均株価は30000円を超えるどころではないでしょうね。

なぜ、日本市場は主力にならない銘柄を選定しているのか。

ただし、現実的には高値圏を目指しても不思議ではないという事なのでしょう。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第4週目

日経平均株価は後半に向けた展望を考えてトレードする

さて、月の後半に向けて価格はどうなるのか。ある程度、「価格の方向性」を推測しておかなければなりません。要するに、ここから緩やかに上昇していくのか。もしくは、短期的な下落の局面に発展するのか。さらに、持ち合いレンジが継続してしまうのか。

基本的に、日本市場の相場において３つの時間軸を考えながら戦略を立てています。

・長期的には上昇トレンドは継続しています。

・中期的にも上昇トレンドは継続しています。

・短期的には下落の局面になる事があります。

ちなみに、下落の局面というのは突発的に起こります。だから、急落した時に慌ててしまい建玉を決済するのに時間がかかります。つまり、一時的にマーケットがパニック売りの状態を引き起こしている相場に付き合ってしまうと、上手に利益を積み重ねる事ができません。

ちなみに海外投資家は、高値圏になると毎回のように利益確定売りを繰り返します。しかし、時間が経過すれば、価格はふたたび緩やかに回復していく。このパターンを知っているだけでも損失を回避する能力が働いて、余計な場面で新規エントリーしなくて済むわけです。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第5週目

日経平均株価とNYダウ平均株価の関係性を考えながら相場を観測する

さて、日経平均株価は２９０００円台に位置しています。なので、月末までに年初来高値の位置までは難しいでしょう。一方で、NYダウ平均株価は年初来高値を更新しています。それどころか上場来高値を更新する場面となっております。

ではなぜ、日本市場と米国市場において価格差が広がっているのでしょうか。恐らく、それは銘柄の選定に違いがあるのでしょう。基本的に、日経平均株価は多くの鉄鋼業、ゼネコン、銀行、証券が含まれた銘柄で構成されています。

一方で、NYダウ平均株価はハイテク関連が含まれた銘柄で構成されています。つまり、人気銘柄で構成されているので、海外投資家は買い検討しているという事なのでしょう。

日経平均株価の銘柄においても、人気銘柄（電気、商社、サービス業）も含まれているのですが、その銘柄と同じくらい不人気銘柄が存在します。

だから、全体的な算出となっているので平均すると高値を更新できないのでしょう。そうであっても、年末に向けて海外投資家が買い検討することになれば、一気に急騰していきます。そのタイミングに期待しておきましょう。

### **木曜日**

第1週目

日経平均株価は海外投資家による新規買いがあれば回復していく

さて、日経平均株価は下値模索の展開からV字回復している様子が伺えます。

まず、価格は1000円以上も回復して、安値圏から脱出することができました。そこから、いよいよ回復期に向けてバトンタッチする展開となっています。

その背景には、海外投資家による「買い」圧力が原因という事なのでしょう。

基本的に、日本市場のメインメーカーは海外投資家になります。彼らが、本格的に参加することになれば、価格は素直に反応して動き出します。

今回、中期的な目線で見れば上昇トレンドは継続しています。

つまり、年末に向けて緩やかに上昇回復することも可能という事なのでしょう。要するに、短期的に、価格は「利益確定売り」のため下落していくけど、その後は、中期的に上昇回復していくというパターン。果たして、どこまで上昇することが出来るのでしょうか。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第2週目

日経平均株価は、価格の方向感があらわれず値動きが乏しいです

さて、日経平均株価は、価格の方向感があらわれず値動きが乏しいです。特に、方向感が出現していないのでポジション取りが難しいです。

つまり、持ち合いレンジ相場になっているという事なのでしょう。

この場面で、買い・売り検討してもロスカットされる可能性が高いです。つまり、新規建玉をエントリーしたとしても無駄打ちになる可能性が高い。結局、ホールドする我慢強さがなければ、含み利益に変化する前に自分の建玉ポジションを解消してしまいます。

もしくは、ロスカット連発してしまうとか。こういう時期は、1度ポジションを入れて「何かおかしいな？」と気づくようでしたら、その後は見送りの時間に費やすことをお勧めします。

そして、価格の値動きが出現し始めたら、新しいポジションを取ればよいという事なのでしょう。まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第3週目

日経平均株価の主軸銘柄は堅調に推移しています

現状、日経平均株価における主力銘柄は堅調に推移しています。あとは、主力以外の銘柄に対して海外投資家が注目してくれると、株価は上昇していくという事なのでしょう

まず、セクター別に分けると

・買い銘柄「電気、自動車、商社」など。

・中立的「医薬品、化学、小売業、食品」など。

・売り銘柄「建設、銀行、保険、不動産、証券、通信、鉄道」など。

ここから、日経平均株価は30000円～31000円ゾーンを目指すには、海外投資家による新規買い待ちになります。もしも、ここから一部の主力銘柄のみ買われて、人気のない銘柄が売られ続けた場合。ふたたび、相場は「持ち合いレンジ」のまま中途半端になってしまいます。

ただし、全体的な相場を考えると「買い」優勢であることは間違いありません。あとは、時間軸と新規買いのタイミングが合えば、上手に利益を追求できる場面となっております。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第4週目

日経平均株価は25日移動平均線の位置を参考にしている

さて、価格の動きを分析する時にテクニカル指標など使います。

投資家が参考にしているのが「移動平均線」になります。

ちなみに、日足チャートにおける5MA・25MAです。

要するに、移動平均線の位置より価格が上値or下値なのか。

そして、

・5MAが25MAを上値抜けた場合　ゴールデンクロス　買い

・25MAが5MAを下値抜けた場合　デッドクロス　　　売り

という事になります。

ただし、これはあくまで教科書通りのテクニカル分析です。

価格は、様々な要因「政治的・経済的・地政学」が重なって成立します。

いつの間にかテクニカル分析の至上主義になってしまうと、本来ある自分自身のトレード戦略を見失ってしまう可能性もあります。

なので、テクニカル分析は、あくまで参考程度にするだけで良いでしょう。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第5週目

日経平均株価は持ち合いレンジ相場になっている

さて、日経平均株価の動きとして、節目29000円辺りで上下を繰り返しているという印象です。当面29000円を超えると戻り売りが発生して下落していく。逆に29000円を割れると買い戻しが入って上昇していく。要するに、持ち合いレンジが継続しているという事なのでしょう。

ちなみに、個人投資家にとって持ち合いレンジ相場というのは難局を示す相場となります。何故ならば、価格がレンジブレイクしたので買い検討する。すると「高値掴み」に遭遇する。逆に、価格がブレイクアウトしたので売り検討する。すると「安値掴み」に遭遇する。

こういう時期に参加すると高確率で損失ばかり積み重なってしまうので注意が必要です。ここは焦らずにじっくりと相場を観察する。チャンスの時期ではないという事を頭に入れておけば良いでしょう。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

### **金曜日**

第1週目

日経平均株価は25日移動平均線を上回ることが出来ました

今週になって、日経平均株価は25MAを上回って推移しています。とにかく、現状の相場においてポジティブ材料に反応しています。日経225種の個別銘柄においても、高値を目指す銘柄が増えてきました。

果たして、年末に向けてもう一段上昇していくのでしょうか。それとも、小休止として利益確定「売り」が発生するのか。あくまでも中期的な目線で考えると、買い優勢の相場に発展しているということなのでしょう。いったん抵抗線ラインをレンジブレイクすると、価格は素直に上昇する傾向になります。

いづれにしても、まずは、午前中ザラ場の相場を観測する予定です。

第2週目

日経平均株価は、どちらかの圧力が蓄積されているような場面です

さて、日経平均株価はある一定の圧力が蓄積されている気がします。

・買い圧力が放出されれば反発上昇していく

・売り圧力が放出されれば戻り下落していく

そろそろ、どちらかの方向へ進んでもおかしくないような相場です。今のところ、日本市場だけ軟調に推移しています。つまり、米国市場と為替市場を比較すると、日本市場だけ出遅れいている様子が伺えます。

ここから、全体的に評価されれば本格的に上昇する事も可能という事なのでしょう。ただし、そのタイミングは、海外投資家の買い圧力次第という事になります。ここは、落ち着いて、下落した場面をじっくりと見極めた方がよいでしょう。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第3週目

日経平均株価は長期的な目線として割安と判断している

現在、日経平均株価は「割安」であるという見方をしています。それは、海外投資家による圧倒的な買い越し額から判断できます。現状、日経平均株価の主力銘柄において過去最高益を出したり、好業績な企業ばかりです。

さらに、日銀は年間12兆円⇒6兆円へ減らしながらも「ETF」買いは継続しています。つまり、日経平均株価は長期的な目線で考えると、まだ上昇する余力が残っています。

ただし、短期的な下落の局面が起こることも想定しなければなりません。当面、海外投資家は高値圏になると買いポジションを利益確定売りにチェンジします。その時期が過ぎると、再び株価は上昇していくという事なのでしょう。←ここを狙って「押し目買い」です。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第4週目

日経平均株価と日経225先物の価格的な連動性を考える

さて、日経225先物の価格は日経平均株価と連動しています。まず違いとしては、225銘柄の配当金・配当利回りなど加算されていないことです。なので、決算ピーク「3月・9月」辺りになると、日経平均株価との価格差が、100円～150円程度広がることがあります。

ただし、その価格差は数日程度かければ埋まります。とにかく、日経225先物の投資は、利益を追求できるようになると面白いマーケットです。そして確固たるトレード戦略が完成すると、半永久的に収益を積み重ねることが出来るような相場でもあります。

要するに、特徴的なパターンと「相場の癖」を理解することです。これができるようになると、収益は向上します。まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。

第5週目

日経平均株価は29000円辺りで調整時期となっています

さて、日本市場は持ち合いレンジ相場となっています。ちなみに、10月相場を振り返ってみると乱高下相場でした。10月に入ってから29000円辺りから27000円前半まで急落していきました。

その後、急騰して29400円辺りまで回復しました。そして、29000円の節目辺りで上下を繰り返しています。恐らく、価格の調整時期という事なので急落する可能性は低いでしょう。

むしろ、下落した場面は「押し目買い」チャンスと捉えています。そして、年末に向けて買いホールドしていれば、ある程度の利益を確保できるような相場となっています。こういう時期は売り目線を外した方が上手に利益を追求できると思います。

まず、午前中のザラ場から相場を観測する事にしましょう。